

月報

91号

発行所

青丘文庫

編集・発行★監 曜

〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1

メゾンド青丘ビル2F

TEL (078) 734-5989

FAX (078) 735-8668

日韓キリスト教史研究会

第三九例会(一九九三年二月一八日)

日本人キリスト者と朝鮮

蔵田雅彦

日本人キリスト者の朝鮮に対する関わりについては、幼方直吉「矢内原忠雄と朝鮮」(『思想』六十五年九月)や安藤肇「植民地伝道と織田樁次」(『世界』六十七年九月)など、六〇年代より先駆的な研究がキリスト者および非キリスト者の歴史研究者によってなされてきた。朝鮮人キリスト者と日本に関しては来日して日本人キリスト者と深い交わりを持った李樹廷に関する研究(呉允台)や金教臣に関する研究(森山浩二)など、六〇年代から七〇年代にかけてやはり先駆的な研究がなされている。さらに七〇年代から八〇年代にかけて、内村鑑三と朝鮮に関するいくつかの論文が、キリスト者および非キリスト者の研究者によってまとめられている。このような人物論を中心とした日韓関係ないしは日韓キリスト教関係研究は、植村正久、浅川巧、乗松雅休、秋月利など、今日その範囲を大きく広げている。しかしながら、人物研究はいわば点の研究であり、その時代の大量の朝鮮観や国家や組織の関わりよりは個人の関わりに注目するために、個人の役割を過大評価するきらいがある。

このような人物研究の限界をふまえながら、より広い歴史的な幅を持った研究もなされはじめている。例えば、内村鑑三、矢内原忠雄、金教臣など、日韓の無教会キリスト者の交流を一貫して追っている森山浩二の研究や、『妄言の原型』(木犀社九〇年)としてまとめられた高崎宗司の日本人の朝鮮観に関する研究などは、点の研究を越えてさらに広がりを持った、いわ

は線の研究の特徴をよく表している。また、韓哲曦・飯沼二郎の『日本帝国主義下の朝鮮伝道』(日本基督教団出版局、八五年)は、日本の教会および個人の伝道者による朝鮮伝道を線として繋いだ画期的な業績である。

このような点と線の先行研究を受けて、わたしたちはさらに面の研究へとその関心を広げていきたい。これは日韓の同時代史研究でもあり、キリスト教を媒介とする日韓交流史研究でもある。すでに、呉允台によって先駆的な『日韓キリスト教交流史』(新教出版社、六八年)が著されているが、キリスト教の護教論的色彩が強いことや、指導者中心の記述であるなど、まだまだ不十分な点もあり、今後本格的な研究が望まれる。

「日本人キリスト者と朝鮮」というテーマを共同研究の課題とするにあたって、これを従来の点と線の研究から面の研究へと飛躍させるために、いくつかの点に留意しておきたい。まず、日韓双方の研究、視点を視野に入れること。この点については、韓国キリスト教歴史研究所との共同作業が望まれる。第二に、人物や教会を研究するにあたって、常にその背景にある日本、朝鮮の情勢および日朝関係を視野に入れておかねばならない。第三に、人物論につきもののエリート史観に偏重しない配慮が必要である。そのためには、教団発行の記録や神学雑誌などに限定されずに、裁判記録や聞き書きなどの一次資料の発掘と利用が求められる。第四に、一般史の業績を視野に入れて一般史との緊張関係の中で研究を行うとともに、キリスト教内部からの視点によって、外部から捉えている一般史研究者の視点を補充すべきである。第五に、歴史研究は正しい歴史認識を確立することにその第一義的意味があるが、そのような成果は今日の教会、および朝鮮史およびキリスト教史研究者に対する問題提起を含むことになるであろう。

朝鮮民族運動史研究会 第131回例会(1993年12月19日)

北朝鮮における解放と金日成の台頭

李景珉

今日の世界において、北朝鮮の金日成ほど長期権力者の地位に存在し、かつ謎につつまれている国家指導者はいない。金日成は、1946年2月北朝鮮の実質上の中央政府である「北朝鮮臨時人民委員会」の委員長に任ぜられてから、以降今日まで、この国の最高権力者として君臨している。封建君主ならともかく、人民民主主義の共和国でこのような長期権力が存在すること自体、ことの性格いかんを問わず、異常と言わねばならない。

ところが1948年9月、北に朝鮮民主主義人民共和国政府が誕生した当初、そこにはあまたの独立運動家が参集し、朝鮮の民族運動の正統性を継承した観があった。他方、対照的にも南の李承晩政権は、その中枢に親日派が浸透していたのである。

それから約半世紀が経過した。その間、朝鮮戦争を経て、北では社会主義建設のスローガンが声高に叫ばれるなかで金日成の独裁権力が構築された。民族運動の指導者のほとんどが粛清され、悲惨な最期を遂げた。そして、金日成に対する異常な個人崇拜が進展するなかで歴史の書き換えが行われ、すべてを金日成個人に帰一させる現代史の叙述が行われた。

周知のように、金日成は1930年代朝鮮の流民が多数居住する中国東北地方において抗日ゲリラ闘争を展開した。朝鮮国内では植民地当局に抗することが極めて困難な状況であっただけに、彼が率いた武力闘争は朝鮮民族の抵抗運動のなかで際立つ存在であった。しかし、日本と満州国の軍隊および警察当局の包囲と追撃のなかでその活動は次第に困難な状況に陥り、1940年8月金日成はソ連領内に退却せざるを得なかった。その後金日成は、いわゆる小グループによる遊撃活動を時たま行ったにしても、基本的に抗日遊撃隊闘争は中止を余儀なくされた。結局彼は、それから解放に至るまで、ハバロフスク付近の野営地に留まらざるを得ず、大戦の終結をソ連領内で迎えたことになる。その間、彼は対日戦を控えたソ連軍の諜報隊の要員となり、いくばくかの訓練を受けることもあったようである。そして戦争が終結してから約一カ月後、彼は遊撃隊の仲間たちと一緒に、ソ連軍の支援の下で帰国を果たした。

報告のねらいは、解放後祖国に戻った金日成が、占領軍当局の庇護のもとで権力を掌握していく過程を明らかにするところにある。朝鮮国内に政治的基盤を持たなかった33歳の青年金日成が、数多の土着の民族運動の指導者らを退けて指導者としてデビューすることが可能であったのはなぜなのか。それを究明することは、北朝鮮の権力に対して抱く数々の疑問に、何らかの答えとなると考える。さらに、冷戦が終結した今日、朝鮮半島に如何なる時代の到来となるのか、一つの示唆が得られるかも知れない。しかし史料の欠如により、解明が不可能なことがあまりにも多く、引き続き今後の研究課題としたい。

在日朝鮮人運動史研究会 第一六一回例会

一九九三年一月二十九日

「大阪府内、各市の在日外国人教育基本方針について」

藤井幸之助

ここ最近、特に在日朝鮮人が集住している大阪府内では、一九九三年一月現在、三三市一〇町一村中、二〇市二町がなんらかの「在日外国人教育基本方針」または「指針」をもつようになつた(大阪府教育委員会は一九八八年に「在日韓国・朝鮮人問題に関する指導の指針」を策定した)。残された市町村は、南部に多く、在日朝鮮人の人口が少ない地域である。また、ある特定の政党の影響の強い教職員組合の勢力の強い地域であるともいえる。

大阪に大阪府同和教育研究協議会が結成されたのは一九五三年五月のこと。その後、一九六〇年代から七〇年代にかけて、各地で部落解放教育がとりくまれ、一九八五年くらいまでに、ほとんどの市町村で「同和教育基本方針」が策定された。

在日外国人教育、特に在日朝鮮人教育はこれにかなりおくれて、部落解放教育の中からうまれてきた。その地の同和教育研究協議会が深くかかわって、「在日外国人教育基本方針」が策定されている。大阪市外国人教育研究協議会が一九七二年に結成され、その二〇年後に大阪府在日外国人教育研究協議会が結成された。「在日外国人教育基本方針」の策定に前後して、各地では在日外国人教育研究協議会もどんどんつくられていく(一府一六市)。一層の内容の充実が期待される。

今回の報告では、実例として、大阪府では箕面市教育委員会「箕面市在日外国人教育の指針(在日韓国・朝鮮人教育からの出発)」(一九九二年)と、これまで全国

各地で出された中で、比較的具体的な内容になっている横浜市教育委員会「在日外国人(主として韓国・朝鮮人)にかかわる教育の基本方針」(一九九一年)をみた。それまでの一定の取り組みの中からうまれてきたものだ。

一九八八年以降、府内各地で策定されたものをみると、柏原市や熊取町のように大阪府教育委員会「在日韓国・朝鮮人問題に関する指導の指針」の項目とまったく同じものがあげられているのはただけでない。おそらく、教育委員会主導でつくられたのだろう。地域の実情にあわせた内容の検討が必要だろう。また、予算措置のつかない「指針」よりも、それがつく「方針」をつくらなければいけない。

いずれにしても、「在日外国人教育基本方針」の策定は、在日外国人教育の第一歩であって、あればそれでいいというものではない。実際の教育現場に生かすための担保にしなければいけない。そうしてこそ意味がある。すでにある自治体でも、今後、よりよいものにする作業をおこたってはならない。また、朝鮮人以外で、新たに渡日した外国人の児童・生徒のことばの問題にはじまって、多文化教育も考えなければならぬ。そのさい、在日外国人保護者・教職員・教育委員会の三者の連携はかせないし、外国人教育を他人事としない日本人市民の参加も望まれる。そうすることによって、民族や国家を越えた教育内容をつくっていくことができる。

朝鮮人などの外国籍の教員の採用も積極的にすすめるければならないのは言うまでもない。

大阪府以外にも、全国各地の在日外国人教育基本方針をあつめて、資料集をつくる予定をしている。リストの必要な方・情報をお持ちの方は、

☎五三三 大阪市東淀川区菅原五一三一〇

TEL・FAX〇六(三二八)一〇七三藤井幸之助まで」

◆新着図書御案内◆

- ・朝鮮史研究会論文集
- ・韓国史研究叢報
- ・東洋學 第23輯
- ・伊藤博文と安重根
- ・大阪市立大学東洋史論叢
- ・朝鮮人強制連行真相調査団
- ・日本基督教団年鑑 1994
- ・韓国に住む
- ・中国
- ・「満州国」の研究
- ・東亜日報 縮刷版1993.8
- ・同右 1993.9
- ・亜細亜研究 第36巻1号
- ・同右 第35巻
- ・基督教思想12
- ・朝鮮奥地紀行
- ・強制連行の企業責任
- ・朝鮮學報 146輯
- ・明治七年の大論争
- ・日本學 12輯
- ・城津市史 1993
- ・朝鮮史研究会
- ・國史編纂委員會
- ・東洋學研究所
- ・佐々木隆三著
- ・東洋史研究会
- ・渡邊周一著
- ・日本基督教団出版局
- ・金 光鉉著
- ・陳舜臣他著
- ・山本有造著
- ・東亜日報社
- ・同右
- ・高麗大学
- ・同右
- ・大韓基督教書會
- ・朴 尚得著
- ・古庄正著
- ・朝鮮學會
- ・牧原憲夫著
- ・東國大学校出版部
- ・城津市史編纂委員會

◆研究△云御案内◆

- 日韓キリスト教史研究会 第四一回例会
- 一九九四年二月二六日「土」午後二時
- 報告者 韓哲職 氏
- テーマ 「満州伝道会について」
- 合同研究会 一九九四年二月二〇日(日)
- △第一部▽
- 在日朝鮮人運動史研究会 第一六三回例会
- 時間 午後一時半～三時
- 報告者 滝尾 英二氏
- テーマ「在朝日本人の女性たち」
- 「書誌」的アプローチの試み
- △第二部▽
- 朝鮮民族運動史研究会 第二三三回例会
- 時間 午後三時半～五時半
- 報告者 姜 在彦氏
- テーマ「満州の朝鮮人バルチザン」以後
- ※場所はいずれも青丘文庫にて